

氏名	大原 さやか
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 89 号
学位記授与の日付	2025 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 4 項該当
学位論文題目	「移行滞留型」（精神障害）利用者の就労意向を実現する効果的支援モデルの提示～就労継続支援 B 型事業所において、心理社会的支援（個別支援・集団支援）を含むソーシャルワーカー・アプローチに注目して～
論文審査委員	審査委員長 鶴岡 浩樹 審査委員 木村 容子 審査委員 豊川 信幸 審査委員 菱沼 幹男 学外審査委員 吉田 光爾

【論文要旨】

背景:地域生活を送る精神障害者の6割は一般就労したいという希望を持っている。2006年障害者自立支援法にて法制度化された就労継続支援B型事業所（以下B型事業所）から障害者雇用による一般就労に移行する人数はここ10年で倍増している。B型事業所にて一般就労を希望しながらその意思が曖昧な「移行滞留型」（精神障害）の利用者に対して、利用者の希望を叶える支援を展開する必要がある。

目的:作業や活動を提供するB型事業所において、精神障害者「移行滞留型」が心理社会的支援を含むソーシャルワーク・アプローチを受けることで、「移行滞留型」の「リカバリーの根幹」に働きかけられ、一般就労への意向を実現する支援モデルを提示することである。

方法:理論研究よりリカバリー概念とストレングスモデルの整理を行い、新たな概念である「リカバリーの根幹」について説明したうえで、B型事業所の支援方法と変化の経過である導入期・展開期・社会参加期と期ごとに設定した概念図を作成した。そして、概念図を基に全国事業所アンケートを行い、単純集計、自由記述、マンホイットニーのU検定、重回帰分析、相関分析、クロス集計と χ^2 二乗検定を行った。さらに、アンケート回答事業所から選定した16事業所にインタビュー調査を行い、Krippendorffの内容分析を行った。

結果:移行滞留型の利用者の存在を詳述し明らかにした。また、B型事業所の支援（作業・活動、動機づけ面接を用いた個別支援、グループを活用した支援、個別支援計画を軸にしたケアマネジメント）において、各期（導入期・展開期・社会参加期）においてどのような支援を行うことで、B型事業所から一般就労に移行することが可能になるかが明らかになった。

結論:B型事業所から一般就労に移行するソーシャルワーク実践である支援モデルを提示した。また、移行滞留型の存在を定義し、「リカバリーの根幹」という独自のリカバリー観を提示した。

Background: Approximately 60% of individuals with mental disabilities living in communities express a desire to engage in competitive employment. Over the past decade, the number of people transitioning from Type B Continuous Employment Support Facilities (hereafter referred to as B-type facilities), which were institutionalized under the 2006 Act on the Self-Reliance of Persons with Disabilities, to competitive employment under disability employment schemes has doubled. However, among B-type facility users is a group of individuals with unclear or inconsistent intentions toward employment (“transitionally-stagnant” users) who still express a desire to work. Support measures that enable these individuals to achieve their employment goals are required.

Purpose: This study aimed to present an effective support model for transitionally-stagnant users with mental disabilities by applying a social work approach that included psychosocial support within B-type facilities. The model sought to activate the “core of recovery” in these users and support them in realizing their intent to transition into competitive employment.

Methods: This study organized the theoretical foundations of recovery and the strengths model and introduced “core of recovery.” Based on this, conceptual diagrams were developed for each stage of user progression—(the initial, development, and social participation phases)—within B-type facilities. A nationwide questionnaire survey was conducted based on these diagrams, and data were analyzed using descriptive statistics, open-ended responses, Mann-Whitney U tests, multiple regression analysis, correlation analysis, cross-tabulation, and chi-square tests. Interviews were conducted with 16 selected facilities that responded to the questionnaire, and qualitative data were analyzed using Krippendorff’s content analysis method.

Results: The study clarified the characteristics and needs of transitionally-stagnant users. It also revealed the types of support (such as work activities, individual support using motivational interviewing, group-based support, and care management centered on individualized support plans) which facilitated users’ transition from B-type facilities to competitive employment in the initial, development, and social participation phases.

Conclusion: This study proposed a practical social work-based support model to promote the transition from B-type facilities to competitive employment, and defined the existence of transitionally-stagnant users and introduced the original concept of “core of recovery” within the recovery process.

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規程及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員4名及び学外審査委員1名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	鶴岡 浩樹	地域医療、在宅医療、EBM、介護ロボット、多職種連携
審査委員	木村 容子	子育て支援、社会的養護、ソーシャルワーク実践理論
審査委員	贊川 信幸	精神保健福祉、福祉プログラム開発・改善と評価
審査委員	菱沼 幹男	地域福祉、高齢者福祉、コミュニティソーシャルワーク
学外審査委員	吉田 光爾	精神保健福祉論、精神障がいのある人へのアウトリーチ支援、プログラム評価

2025年5月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、6月28日の公開口述試験を行った。2025年9月4日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会の結果報告を受け、博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの提案がなされ、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2025年9月25日に「博士（社会福祉学）」の学位を与えることとした。

2 博士論文の評価

本研究は、精神障害のある就労移行滞留型の利用者の問題に焦点を当て、就労意向を実現するための新たな支援モデルの構築を目的とした研究である。タイトルにある「移行滞留型」利用者とは、一般就労を希望しているにも関わらず叶わない人々を指す。修士論文の成果を踏まえた継続的な研究であり、これまで知見がほとんど得られていなかった「移行滞留型」利用者の様態を詳らかに捉えた。また修論研究で導き出した独自の「回復の根幹」概念をより発展させ、「リカバリーの根幹」という新しい概念を創出した。リカバリーの根幹に着目し、一步踏み出すための支援のあり方を、丁寧な文献調査に基づき、量的調査と質的調査を複合させながら論理的に導いた価値ある研究である。オリジナリティは勿論のこと、学術的にも社会的にも意義のある内容となっている。

研究方法は、就労継続支援B型事業所の職員を対象としたアンケート調査およびインタビュー調査である。量的調査も質的調査も丁寧な分析がなされ、得られた結果は妥当なものと解釈できる。審査会での指摘については、次項「最終試験の評価」に記したので参照されたい。論述については、論理的で全体的にわかりやすい記述である。両研究とも倫理的配慮は適切になされている。

以上、総合的にみて本論文は博士の水準を満たしていると判断した。

3 最終試験の評価

B型事業所において、就労という目標に佇んでいる人々を可視化し、「リカバリーの根幹」という概念を発展させたこと、また、その対象層への具体的アプローチを提示した点において、画期的であり、オリジナリティに富んだ研究であるといえよう。上記の点で学術的意義の高い研究であり、対象者層のリカバリーの一端を担う点で社会的に意義ある研究である。審査会では期待を込めて、多変量解析などの提案もなされたが、今後の課題としていただきたい。「移行滞留型」という用語については、当事者がどのように受け止めるかという視点から検討を要するという意見が審査会で出されたが、先行研究がこの用語を使っていることから本論文では容認することとした。今後の検討事項として、本研究の発展を期待するところである。用語の件も含め、各審査員からの指摘事項に真摯に対応したことも付記する。

最終試験については、審査員全員一致で博士号授与に値すると判断した。